

形づくる 人々

第1回 自己紹介

柳川正賢

(やながわ・まさより)

中央法規出版 企画部企画第4課

喝！

はじめまして。私は書籍の出版事業に携わる「編集者」です。“対人援助”そのものを生業とする専門家ではありません。世の中には、専門外の間人が専門のことを言って、それなりに支持されるということが現実に起こっていますが、こういう人が言っていることの中には受け取り手がその後活かせるものがほとんどないのが通例です。はじめにその話をさせていただきます。

私は“編集”という職業柄、人の話をまと

めて記事にすることがあります。例えば、ある研修会の模様を講演内容とともに報じるといった記事。ここでたびたび矛盾に出合います。聞き手の反応はよいのに、話の中身に聞き手が歓迎しそうな要素が見当たらない、ということです。疑問を解明すべく、何人かの参加者に声をかけると、たいていは「話がおもしろかった」で一致します。“おもしろい”が向学心につながることを考えれば、研修主催者のねらいはある部分で達成されているのですが、「参加者へ届けるべき内容を届ける」という第一の目標に照らせば、未達成に違いありません。ここで問題なのは、参加者も主催者も、本来の目的が未達成であることに気づかずに通過してしまっていることです。パフォーマンス（この場合は話術）にカモフラージュされて、目的そのものを見失っていることに気づかない。

ただし、例外があります。受講者が強い目的意識をもっている場合です。「このことを学びたい」と強く思っている人は、それとは異なるものが現れたとき、「求めている内容ではない」とか「そこまではわかっている」、あるいは「そもそも言っていることが間違っているようだ」と反応します。

では、そのことを、このマガジン連載に置き換えて考えてみたらどうなるでしょう。複数の筆者がそれぞれテーマを決めて執筆する。専門分野・活動領域の幅広さとテーマの自由さが内容の多様性や奥行きを生み出してくれそうです。期待大です。ただし、本作りの基本に則ったとき、異例の要素があります。それは、「読者対象を設定していない」「読者ニーズに応えることから出発していない」の

2点です。初めから販売が目的となっている書籍の場合、読者対象を明確にすることとその対象が求めている内容にすることは必須です。それを抜きにしたら売れませんから。

この2点を外しているということは、先ほどの「研修受講者」、イコールここでの「マガジン読者」は、仮に書き手がパフォーマンス重視(この場合は筆術)で押していても、内容の稚拙さや不整合、誤りがあった場合に鋭く反応できないでしょう。そのことは、読み手と書き手の相互交流から何かを作り出していこうとしたときはデメリットです。たとえば、そこに“楽しい”“おもしろい”“ありがたい”などの実感があっても、読み手に有益とはならない、場合によっては害にもなる、というのが私の考えです。

記事は読み手の主体的な動機(これを知りたい、読みたい)から出発していないので、書き手の「何を届けるか」を意識するパワーも大きくないと、うまくは届いていけません。加えて、私自身が文章の専門の端くれだったりしますから、うまいことを言いながら、それなりに楽しんでもらえながら、でも実際には何も届けていないということを、しようと思ったらできてしまいそうです。

これらはすべて、連載を始めようとしている私自身への「喝」です。なぜなら、私はこの連載を通し、読み手とも書き手とも交流したいと思っているからです。にしても、対人援助の専門家ではない者が、専門本体を語らずに何を伝えようとしているのか。もう少し詳しく自己紹介します。

出会い

私は現在41歳。今の会社に入社したのは平成11年の12月。介護保険制度が始まる4カ月前です。その前は7年間、某新聞・某週刊誌で編集記者をしていました。福祉とはまったく別の業界です。福祉に関心をもったきっかけは、親戚の介護問題とそれと連なって生じた不幸な出来事にあります。日本の社会保障がどんな仕組みになっているのか、これからどうなっていくのかを知りたい、そんな漠然とした好奇心が募っていた折に、たまたま中央法規という会社の募集要項を目にし、転職したというわけです。

今思うと、一過性の“熱”だったような気もして、採用されなければ元いた業界で仕事を続けていたと思います。そちらはそちらで魅力にあふれる世界でしたから。

しかし、私は出会ってしまいました。「対人援助」の世界と。初めは数年でやめることになるだろうと思っていました。もともと、社会保障にかかわる見聞を広めながら、自らの好奇心や問題意識を追究することが目的でしたから、ある程度納得がいけば離れていくのが自然です。事実、日本の社会保障に対する自分なりのとらえ方ができるという意味では、転職して2年ほどで目的はほぼ達せられました。とらえたのは、社会保障のなかのほんの一部である「高齢者福祉」のさらにほんの一部ですから、そんなのは知ったうちにも入らないのですが、私にとって大事なものは、心に在った直接の問題意識を自分なりに解明し納得できることでした。仕組みとそこにある構造、そこに関係する人々から紡ぎ出されてくるものを見ていくなかで、ああそうか、

ふうんそうなんだという感触を得る。まだ自分が見ていない部分も、それまで見てきたことの延長線上でおおむね理解できる、推察できる。そこへ至ったということです。

ところが、いつ頃からか、私には心を強くとらえて離さないものが生まれていました。それが「対人援助職」です。ここでいう対人援助とは、相談業務を行う専門職のみを指すものではなく、介護や医療といったサービスを直接提供する職種や、専門資格化されていないけれども同様の営みに携わっている人々（ボランティアやボランティアとまではいえない人）を含んでいます。すなわち、何らかの形で人を支援している人の総称です。

なぜ、心をとらえたのか。それは、「ふつうに生活をしていると出合えないもの」、だけどそれは人間という存在を知る上で抜きにできないもの、がそこにあったからです。

援助を必要としている人は世の中にたくさんいます。でも、援助を必要としていない人は、社会生活をおくるなかでそういう人たちの存在を知ることがありません。情報としては知っています。介護を必要としている人がいる、病気で苦しんでいる人がいる、経済苦で悩んでいる人がいる、と。でも、それは当事者のリアリティとはかけ離れたものですし、ある面ではそこへ排他的な視線が無意識のうちに注がれていることもあります。「ああなったらおしまいだ」「ああはなりたくない」というように。

そう思うのは、人間であれば当たり前だと私は思います。そう思うことが必然とされる社会で生きているのですから。どういう社会かといえば「競争社会」です。受験も就職も

結婚も出世も、大多数の人が人生のルール上に置いているこれらを決する基本原則は「競争」でしょう。ただし、そこには必ず「ルール」があります。ルールは、受験のように形式を決めるものもあれば、恋愛のように人を尊重する気持ちや倫理からおのずと決まってくるものもあります。そのルールを犯して新聞やテレビで報道される事件も少なくありませんが、全体に占める割合でいえば、ルールは機能しているといえそうです。

ルールが機能している（＝競争原理のなかで生き、そのことが常態になっている）と、それとは異なる原理にふれる機会は減ります。必要性が低いのでそうなるでしょう。“それとは異なる原理”とは、先ほど挙げた「ふつうに生活していると出合えないもの」で、それが「対人援助」であると私は感じたのです。競争社会においても、目の前の困っている人を助けるなどということはいくらでもある、というより、それもルールに含まれていると考えられますので、そのこと自体は「対人援助」の専売特許ではありません。私が感じたのは「人との向き合い方」でした。

相手を理解しようとする、思いを汲み取ろうとする、そこへ寄り添っていかうとする、まるごと受けとめようとする。こういうことを仕事にしている人たちを見ていて、最初は「これが“福祉”というやつだな」「こういうのを技術とみなすのか。変わった専門性だな」と思っていました。ところが、知っていくうちに「専門の資格を持っているから、その職に就いているから、という理由だけで役割をまっとうできる仕事ではないらしい」ことに気づきました。

例えば、“相手を理解しようとする”というのは、それが仕事の内容として設定されていればできるかといったら、それだけではできないと思います。相手を理解しようとしている人は、第一に“相手を理解したい”と思っているはずで、理解したいと思って初めて、真の理解に近づける。そういうものだと思います。では、相手を理解したいと思う気持ちは、その職が専門性として求めたら、もてるでしょうか。“理解したい”は自己の内面から起こる主体的な欲求です。外部から求められて湧き起こるものではありません。

ということは、「対人援助」にかかわる仕事はその「専門」の中核に、きわめて人間的なものがある。かかわる人同士の“人間としてのつながり”が最重要ファクターとなる世界。このことが私をとらえたのです。

応援

やがて私は、「現場の実践者を応援したい」と強く思うようになりました。仕事の専門性の中に人間的な何かがあるということは、その仕事を見続けていくなかで、人の人間的な部分を確かめられるということです。確かめられた大きな一つは「人間愛」でした。今日の前で苦しんでいるこの人をなんとかしてあげたいと思う気持ち。それをもちながら頑張っている姿に胸を打たれたのです。

一方では、煮え切らない思いが出てきました。「対人援助」はそこにかかわっている人以外、周囲には見えない世界です。そこにどれだけの価値があるかは当事者たちしか知りません。つまり、外部からは評価のできない

世界です。一面的には、例えば“要介護状態が軽減された”“虐待がなくなった”などのように外部評価が可能な部分もあります。しかし、それはあくまでも“部分”であって、そこだけで対人援助の価値をはかることはできない。少なくとも、私が現場取材のなかで目にしてきたものは多くがそうでした。

周囲から見えないということは、その価値に見合った評価が困難であると同時に、価値や意味（対人援助の真髄）を知る機会そのものが乏しいということです。ああこういう援助があるんだ、この援助によってこんなことが生み出されるんだ、という一つひとつの価値がその場かぎりのもので、周囲の誰もそこにあるものを受け取らない、あったことすら知らずに過ぎ去っていく。これは悲しいことです。

私はいつしかこう考えるようになっていました。この人たちがしていることをきちんと社会のもとに照らし出さなくてはいけない、少なくともそのことの価値を多くの人が考えられる場をつくらなくてはいけない、と。その場こそが、私が携わってきた雑誌『ケアマネジャー』です。

雑誌『ケアマネジャー』

『ケアマネジャー』は、介護保険制度における介護支援専門員をメインの読者対象とした月刊誌です。平成11年7月に創刊しています。こちらの『対人援助学マガジン』の読者のなかには、ケアマネジャーがどんな職種かをご存知ない方もいらっしゃると思います。簡単に言うと、ケアマネジャーとは「要介護状態

にある高齢者の自立を支援する相談援助職」です。雑誌の中身に関しては、次回以降の内容と関連して登場してきますので、ここでは置いておきます。



私はこの雑誌の製作を通じて、数多くの現場取材してきました。現場は大別すると、市町村行政、援助実践者、利用者（クライアント）、の3つです。

現在、全国には市町村の数が約 1700 あります。私はこのうち約 550 の市町村行政、主には介護保険や高齢福祉の担当課と接点をもってきました。現地（市町村の庁舎等）を訪れて直接取材したのは 168 市町村です。私がこちらの業界にやってきた平成 11 年当時は約 3300 市町村あり、合併前後の両方を取材している市町村もありますから、単純に 1700 分の 550 ということではありません。だとしても、かなりの数だと思います。もし、日本に私と同じくらい市町村行政取材されている方がいたら、ぜひお知り合いになりたいです。きっと濃密な情報交流ができるはずですよ。

援助実践者は数え切れません。事業所の数にして、現地・電話取材や原稿依頼が成立するというレベルで 600～800 事業所、現場の状況を調査するためのアトランダムなヒアリングなどを加えると、ゆうに 2 倍は超えます。「はじめまして」という言葉を 3 日も続けて発さないと、仕事を満足にしていけない感覚にとられる、そんな頻度のアクセスです。機関属性は居宅介護支援事業所を筆頭に、介護保険の在宅サービス事業所（訪問介護や通所介護、訪問看護、福祉用具など）、入所・入院施設の特別養護老人ホーム、老人保健施設、病院、行政所管かそれに近い性格をもつ保健センター、社会福祉協議会、地域包括支援センターなど。

利用者（クライアント）の取材は、援助実践者の取材の過程で利用者の自宅や入所施設の居室を伺い、援助者のかかわりを通して間接的にそこに在るものを受け取る形が多く、この頻度は月に 1～2 回程度。利用者の生の声を直接聴きたいときは、紹介者（主にはケアマネジャー）を介して 1 対 1、あるいは家族が同席する形でインタビューをします。こちらの頻度は年に 1～2 回と少ないです。

なお、現在の所属についてですが、今年 4 月に部署を異動し、約 10 年務めた『ケアマネジャー』の編集部を退任しています。今の仕事は、社会福祉士や精神保健福祉士などの資格取得を目指す人のための書籍づくりが中心です。といっても、現場の視点をもって臨むこれまでのスタンスは変わりません。

これらを細かくお伝えしているのは、私が何者であるか、言い換えると「本連載に何を期待できそうな人間か」のイメージをもって

いただくためです。私は本稿の冒頭で、「専門外の間人が専門のことを上手に言っても、受け取り手の役に立たない」と言いました。この持論にしたがい、私は自らの“専門”で連載を展開していこうと思います。私の専門、それは「情報」です。

連載の目的も挙げておきます。一つは、「情報を通して読者をつなぐこと」。つながると新しい何か生まれる、そのことをいくつもの事例から確かめています。2つや3つ、それ以上を媒介する中継点になりたいと思っています。

もう一つは、「すべての現場実践者へのエール」です。私は先ほど、現場実践者を応援したいと思った理由のなかに、頑張っている実践者の姿に胸を打たれたと挙げました。もしかしたら、こう思った方がいるかもしれません。「そんな志の高い人は少数だ、実際はひどいのが多いんだから」と。そんなことは百も承知です。数を知っているということは、そういうことです。でも、たとえ100人いるなかの99人が“ひどかった”としても、残った1人の“すばらしかった”は絶対不変のものです。“悪いもの”は目立ち、また排除の対象となるため、その割合が多い場合も少ない場合も、全体の傾向としてとらえられがちです。だからこそ、たった1つの輝きのほうに目を向ける。それが、やはり先述した「この人たちがしていることをきちんと社会のもとに照らし出す」ということです。照らし出されたものを見て知って、“ひどかった”といわれていた側が変わる可能性もあるでしょう。“ひどかった”には理由もありますから、私はこちらにもわりと好意的です。

*

長い自己紹介になりました。「理解」と「興味」は大概不可分です。次回からの内容を受け取っていただくために、私自身に少しでも興味をもっていただく必要がありました。ここまで読み進めた方は、少なくとも何者かさっぱりわからないという状態ではなくなっていると思います。しかし、長い文章は好まれない昨今の風潮を考えると、第1回から失態を演じたかもしれません。今、気づきました。

タイトルの『形づくる人々』は、長大な自己紹介から内容をご想像ください。

次回より本編です。楽しみにしててください。